

多文化リテラシー教育の構築に向けて

—文教大学文学部・中国短期留学プログラムの現状と課題—

長谷川 清・張 慧芬

Toward the reconstruction of multi-cultural literacy education;
the present situation and problems in the Study Chinese Language Abroad program at Bunkyo University

Kiyoshi Hasegawa, Zhang Huifen

In this paper, we have analyzed the results of educational practices about the intensive Study Chinese Language Abroad program based on educational cooperation between Beijing Foreign Studies University and Bunkyo University since 2009. The purpose is to improve communicative Chinese Language skill and international consciousness. We pointed out that this program is effective for the improvement of student's communicative skills on the global and international scene, and at the same time what kind of problems we have faced in the present situation. The basic data are students' reports which are written after the end of this program.

1. はじめに

グローバル化への対応は様々な分野で進行しており、大学における教育目標の設定やカリキュラム編成、各種の研修企画・プログラムにも大きな影響を与えつつある。その点は「グローバル人材」の育成を謳ったカリキュラムの創出や留学プログラムへの取り組みを必須の課題である

として、それに取り組む姿勢を鮮明にする大学が近年増えていることから明らかである。受験雑誌の特集や新聞記事・広告などにそうした動向の一端を見ることができる。しかし、「グローバル人材」とはどのような人材のことを言うのかについては、グローバル化時代に対応しうる知識や技能、感性の涵養など、ほぼ共通した課題が表明されているとはいえ、その具体化のための方策や達成基準、評価方法はあいまいであり、統一的な方針があるわけでない。したがって、具体的なプログラムのなかにそうした目標をいかに埋め込み、それまでの教育理念とどのように整合性を持たせ、新たな特色として展開していくかについては、それぞれの教育実践の主体が授業改善、カリキュラム改定などと合わせて、トータルな視点から取り組むべき課題のように思われる。以下では、文教大学文学部（以下、文学部）において、北京外国語大学との教育連携において実施されている「中国短期語学・文化研修」の事例を検討する。その意図するところは、学部教育の前半期における外国語学習とコミュニケーション活動、異文化理解力の向上などを目的とする短期留学プログラムがどのような形で実践され、いかなる課題を抱えているかを具体的に検討することが必要だからであり、それを通じて文学部におけるグローバル人材育成をめぐる今後の議論につなげたいと考えるからである。

この研修企画は16日間、中国語を学びながら北京外国語大学のキャンパスで留学生生活を体験し、あわせて中国社会の実際に触れるという内容であり、イギリス語学・文化研修、日本語教育研修とともに文学部が学部3学科在籍の学部学生に提供している海外研修プログラムの一つである。2009年に試行プログラムとして開始して以来、すでに5回が実施されており、中間的な総括をしておく意義があると思われる。本稿中で用いている学生記述のコメント資料はすべてこのプログラムに参加した学生によって書かれたレポート中より得ている。学生一人一人の等身大の中国

体験や異文化接触に伴う心理、反省的思考が綴られているので、資料として一定の有用性を持つと判断した¹。

2. 短期留学プログラムの変遷

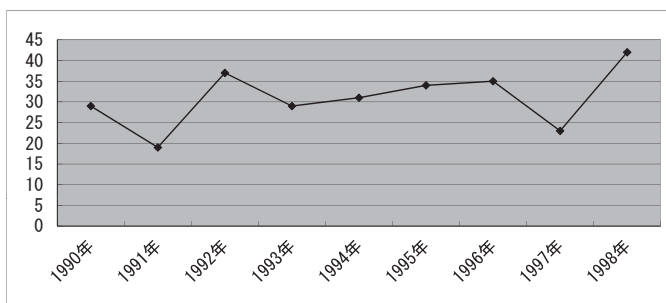
文学部の創設は1987年4月である。21世紀の国際化社会に相応しい広い視野と知性、並びに豊かな感性を備え、実践的な能力を持った人材の育成を目標に掲げ、日本語日本文学科、英米語英米文学科、中国語中国文学科（以下、中文科）で発足した。日中間の交流拡大という国際情勢をふまえ、中国語のニーズが増大するとの判断が中文科の創設を導いた要因である。したがって、学科開設時から中国留学プログラムは重要な検討課題となっており、その導入に向けた準備がなされた。南開大学（天津市）との一般協定の締結が契機となって、夏期休暇中の4週間の短期研修がスタートし、1990年から1998年まで同大学で実施された。その間、参加者は20名から40名の間を推移し、第9回の1998年度を最後に認定留学プログラムに発展的に移行する形で廃止した。

廃止に至った理由は、学科教員の引率業務が毎年交代で担当するとはいっても中文科所属の教員だけでこなすには負担が大きすぎたことが理由の一つである。だが、理由はそればかりではない。90年代に入り、中国の社会事情は大きく改善されることとなり、治安、交通事情、通信等において日本とほぼ同等の水準に達したことにより、学生が留学生活を送るうえでも教員が引率して大勢の学生を団体として管理する方式が留学本来の目的からして最良とは言えないと判断したことによる²。

1 本稿は「言語文化教育とグローバル人材育成－東アジア地域の多文化リテラシーの比較」（2012年度、大学院言語文化研究科付属言語文化研究所共同研究）の研究成果である。国際連携型の共同研究であるが、総括するにあたっての文責は長谷川にある。

2 『学園80周年誌』、79-93頁を参照。対外漢語教学の歴史及び改革開放後の展開については、朱全安（1993）を参照。

図1 中国短期留学プログラム（南開大学）の参加人数



（出所）『学園80周年誌』、88頁の参加人数統計を参照。

中文科のカリキュラムは、現代中国語の習得を基礎とする一方、中国古典・思想、中国近現代の社会・文化、語学などの領域と専門分野にわたる授業科目を配置している。何度かの改定を経て、2003年に現在の3コース（中国語学・応用中国語、中国古典・教養、中国現代社会・文化）に再編した。その際、授業科目を入門・基礎の段階から応用・専門へと系統づけ、現代中国語の文法、講読、会話、作文に関する中国語の基礎固め（1年次）、3コースへの分化と専門科目の学修（2年次）、専門性の深化とゼミナールにおける課題探究（3・4年次）という段階を経て多面的な中国理解をめざすとし、中国語コミュニケーション、外国語実地研修、中国語実地研修などの実用的な中国語の習得を可能にする科目を開設した。こうしたなかで、中国語を使った実践的コミュニケーション能力の向上を図るための自律的な学習機会として留学プログラムを位置づけたのである。留学プログラムは希望する学生が自己の責任において留学し、学科はそれをサポートするという形式が理想であり、それに近づくためのプログラムとして8つの認定留学校への留学推進が課題であった。

しかし、こうした教育的な意図とは別に、学生の海外留学へのモチベーションは必ずしも高くない点が問題の一つであった。この点をすこしでも改善するための方策として、認定留学の前段階にあたる導入的な短期プログラムを設け、長期留学へのステップとするのが効果的ではないかとの状況判断もあり、一旦は廃止した語学・文化研修プログラムを復活するに至った。その際、南開大学から北京外国語大学への変更、研修期間と引率業務の短縮化という2つの措置を講じ、2009年に試行プログラムを実施した。同大学は1941年に創立された「延安外国語大学」が前身で、北京の有名大学が集中する海淀区に位置するため、周辺環境が良く、初めて中国留学を経験するキャンパスとしては適当であること、ネイティブ教員によるきめ細かな少人数クラスで基礎から学習できる対外漢語教学のプログラムは定評があることなどが選択した理由だが、中文科では現地視察を行って入念な検討を行う一方で、学部としては一般協定の締結を視野においた交流関係の構築に重点的に取り組み、2012年には締結を実現することができた（写真1・2・3・4）。

3. 中国短期語学・文化研修の創出と展開

3-1. プログラムの創出

中国短期語学・文化研修は自主参加型の海外研修プログラムである。その特色は「短期語学・文化研修」という名称が表わすように、短い期間のなかに中国語と中国文化に関する研修項目が文字通りぎっしりと詰まれている点にある。語学学習に関しては月曜日から金曜日までの中国語のみの授業、異文化体験としては歴史文物・史蹟見学、芸術鑑賞、北京市内での自由活動があり、また日本語学部の協力を得て日本語を学ぶ学生との交流の機会があり、相互学習の機会も設けられている。その際、渡航手続きと研修企画について専門的なノウハウを有する毎日エ

デュケーション（株）のサポートを受けている。煩雑な渡航手続業務（航空券、ビザ、海外旅行保険など）、危機管理のアナウンス、同社が有する現地アドバイザーの制度は、引率業務に負荷される心理的なストレスを回避する上で一役買っている。このように、多方面の部門がうまく連携しあっている点が、不安定な日中関係の影響を毎年何らかの形で受けながらも、一定数の参加希望者を確保してきた理由の1つだと思われる。

これに対して、中文科を含む大学側ではオリエンテーションと申込手続き、事前研修などを設けており、オリエンテーションの内容と形式をすこしずつ整備してきた。その際、教育支援課国際交流係による留学支援業務の全体的な運営とスケジュール管理は不可欠であり、越谷キャンパスの事務体制のなかに、それが整備されている点は改めて説明するまでもないが、それだけで留学プログラムが円滑に進行できるわけではない。

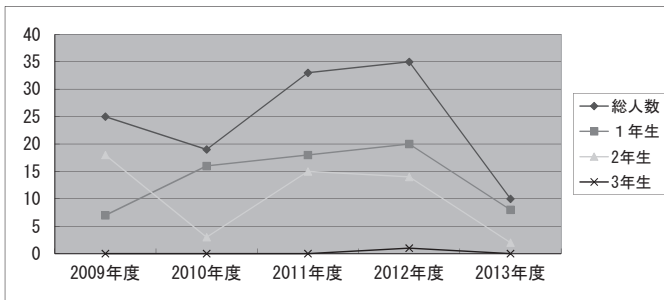
中文科では学科内に留学委員を置き、学生に対する広報活動、留学希望者への個別相談、オリエンテーション、事前研修、事後研修オリエンテーションに至るまで、教育支援課国際交流係との連携によって留学プログラムを支えている点は強調しておかねばならない。選抜の面接を含めて、中国語学習のみならず文化研修としての留学の意義と心構え、北京の紹介等、参加学生の意識を変え、現地での研修をより充実したものにする指導を行い、それが効果をあげてきたのである。また、2012年度からは「中国留学にチャレンジ！」と題した特別講義を追加した。北京外国語大学のキャンパスをよりよく理解してもらうために、同大学日語系の先生方を短期で招聘し、中国留学の意義や中国語学習のポイントなどを参加希望者に講義してもらうイベントであり、4号館に自律学習の施設として開設された多言語交流室において実施している³。

3-2. 参加人数の推移

これまで実施した5回の参加者人数の合計は112人である。内訳は男子27人、女子85人で、圧倒的に女子学生が多い。また学年別にみると2009年度を別とすれば、1年生の占める比率が大きい。前述の南開大学での短期留学プログラム（1990年～98年実施）と比較すると平均人数は若干少なくなっている。

注目したいのは、2013年度の大幅な減少である。その理由は中国食品問題、反日ナショナリズム、尖閣諸島をめぐる問題などによる日中摩擦の拡大、PM 2.5の大气汚染問題によって、日本人の対中イメージが悪化している点がアンケート調査の結果に出ているが⁴、こうした動向と連動しているものと思われる（図2・3・4）。

図2 参加人数の変遷

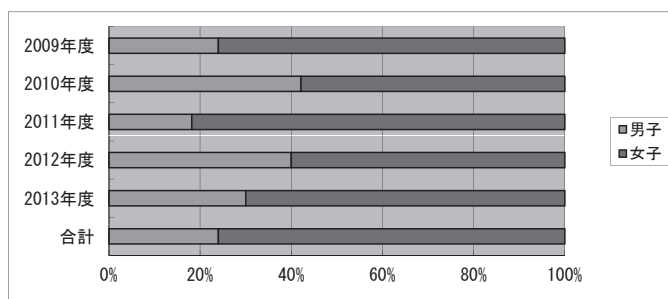


（出所）参加者名簿の集計に基づく。

3 「中国留学にチャレンジ！」としたのは2012年からである。第1回は同年8月1日、4号館の多言語交流室において実施した。邵建国（北京外国語大学日語系教授）、張慧芬（同、教授）の両名の先生が講師を担当した。その時の講義資料は巻末の「付録」参照（張慧芬作成・長谷川整理）。なお、2011年には于日平教授（同・日語系教授）、2013年には魏然先生（同・日語系専任講師）が担当した。関係各位に謝意を申し上げます。

4 内閣府（旧総理府）世論調査「外交に関する世論調査」
<http://www2.ttcn.ne.jp/~honkawa/7900.html>

図3 参加者の男女別比率



(出所) 参加者名簿の集計に基づく。

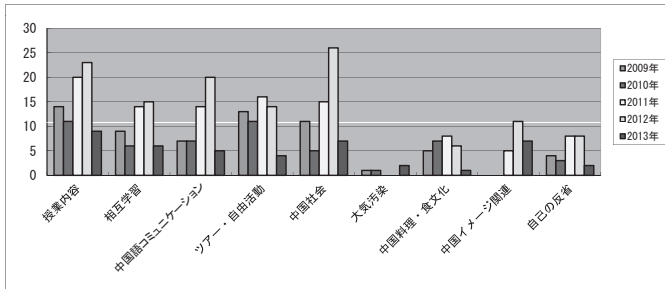
4. 留学プログラムの教育効果と評価

4-1. 学生の関心領域

海外留学プログラムは大学の通常の授業の外側にあり、オプションとして設けられている学習機会である。その効果は参加した個々人のモチベーションや目的意識によって違いが生じてくる。一般に留学は滞在期間の長短によって成果も異なるとはいえ、人生の過程として捉えた場合、留学体験を通して人間的に成長していく点が指摘されている。語学力の向上だけでなく、異文化のなかで生活することによって、自己を取り巻く環境や自文化の状況を再確認できるからである。2週間の短期滞在は参加した学生たちに何をもたらし、どのような成長を促したのだろうか。その検討に入るための基礎的な作業として全てのレポートの内容を吟味し、記述内容を大まかに分けてみたのが図4である。このプログラムでは、研修終了後にレポート提出を義務付けており、「中国短期語学・文化研修報告集」にまとめている。A4版(36字×32行)見開き2ページ以内で研修中に見聞した内容や印象、中国語学習の成果などを中心に自由に記述するが、内容は様々である。ここでは、段落のまとまりを目

安にそこに書かれた内容をだまかに分類したが、複数の内容に関わることが混じり合っているため、資料の整理において手続き上の難点がある。しかし、学生がどのようなことに関心を抱いているかをだまかにつかむことができる。

図4 レポート記述の内容分類



(出所) 各年度の文集に基づく。厳密な内容分類ができない部分もあり、集計結果は概数である。また各レポートはそれぞれ複数の記述内容を含む。

中国語学習に関する内容とそうでないものとに区分し、記述対象を①授業内容、②補講、③中国語によるコミュニケーション実践、④歴史文物ツアー・自由活動、⑤中国社会・文化（交通ルール・マナー・接客サービスなど）、⑥中国料理・食文化、⑦中国イメージ、⑧自分についての反省的思考に分類した。もちろん、これ以外の内容も含められるが、ここでは扱わない。いずれも異文化コミュニケーション論のトピックやテーマとなるものばかりである。以下、授業内容、補習、授業外の中国語コミュニケーション実践、中国イメージの4項目に関する記述内容を検討する。しかし、全てを紹介することは不可能であるので、多少恣意的な選択になる点は避けられないが、レポート全体に共通する蓋然性に

は留意したつもりである。全体を通しての感想は短期研修に参加して良かったとしている記述が多く、参加しなければ良かったという否定的な内容のレポートは皆無である。

4-2. 授業内容

研修時の授業はレベル別、少人数で編成され、すべて中国語で行われる。授業内容は主に日常生活に必要な会話を中心としており、分かりやすい内容となっているが、授業を担当する教員は日本語を話すことができない。したがって、授業内容はすべて中国語の説明となるが、時に英語が混じることがある。学生にとって、日本においては到底味わえない期待と不安が入り混じる緊張感に満ちた学習体験である。レポートではこの体験についての記述が多く、それだけ大きな関心事であったことが分かる。

- ・授業は日本語がまったく通じなく、中国語と少し英語が入ってきたりの授業で、日本で受けている授業よりも本当に楽しく、発音なども丁寧に教えてくれたり、間違っている発音を直してくれたり、中国語の歌を教えてくれたりと毎日が本当に楽しく新鮮で、中国語ってこんなに楽しかったっけ？って思いました（2009、女子）。
- ・授業は全て中国語で行われるので、中国に行く前から不安だったのですが、クラス分けのテストがあり、自分に合ったクラスで受けられたし、先生も優しく、私たちが分かるような中国語で説明してくれたり、教科書も難しくなく、無理なく勉強できました。教科書だけでなく、中国の歌をうたったり、映画を見たり、楽しかったです（2009、女子）。

- ・初めの数日は全て中国語で行われる授業についていけず、自分自身の未熟さに悔しくなって授業中にこっそり泣いたこともありましたが、しかし次第に耳も慣れ、どんどん楽しくなっていました。発音を重視した授業で、1人1人きちんと出来るようになるまで指導してくださいました。教科書は、日常生活で実践できるような会話を中心に留学中に観光など使う機会も多くあり、習ったことをすぐに実践でき、会話の幅が広がり、伝わることの喜びを何度も感じる事が出来ました（2010、女子）。
- ・授業は、全部中国語で最初は聞き取れず戸惑ったが、だんだん慣れてきて聞き取れるようになった。この16日間で聞く力が上達したと思う。また、先生に中国の楽しい遊びを教えてもらったり、買い物の仕方を教えてもらったり、課外活動に出かけたり、楽しく授業することができた。先生は中国語しか分からないので大変なときもあったが、普段大学で授業している時より覚えることが多かった（2012、女子）。

以上の記述から、学生たちがしだいにこの授業に慣れていき、最終的には授業内容に満足した状態に変わっていく点が見て取れる。その他のレポートでも「パワーポイントを使つての授業」、「発音を重視した授業」、「伝わることの喜びを何度も感じる」、「習ったことが使えたり聞き取れたりしたときのうれしさ」等々、中国語ができるようになっていくことが伝わってくる事が綴られている。この点は、たとえ参加者のほとんどが1回限りの体験であり、いずれは学生時代の思い出となっていくとしても、中国語教育に携わる者にとっては期待していた内容である。中国語だけの授業に最初は戸惑いを感じながらもすこしずつ慣れていき、

中国語が聞き取れ、簡単な会話が街中でもできるようになっていく。中国語だけで組み立てられた本場の授業を体験することの意味は大きいと言えよう。そして、自信をつけた学生たちの中国語会話のトレーニングの場は教室からしだいに外に向かい、実践の範囲を拡大していくのである。

4-3. 相互学習

研修中に行われる相互学習（補習）は、1回2時間で週2回、午後の時間帯を使って行われるが、文教側2人に北京外大側1人でグループを作り、互いの言語学習のサポーター役を務めるというものである。同じ学生という立場で互いに親近感を抱き、自由なコミュニケーションを行いやすいことから、互いの社会背景や文化の違いなどに気づき、等身大の交流機会として相互理解につながる効果がある。また知り合いになった後、一緒に北京市内を参観したり、学生食堂で食事を共にするなど、友人としての関係性が深まっていっている。教室内の中国語学習では味わえない楽しい経験として、多くの学生がレポートで補習を通じて得たことや意義、学習面のプラス効果などを述べている。

- ・ 補講のおかげで自分の考えが変わった気がする。補講では、日本語を勉強している学生とフリーテーマで一日2時間計8時間やった。その時、勉強の仕方や勉強に対する思いを聞いた。日本と似ているところはあるが、中国のほうが熱心だと思った。それに、しっかりと志と目標を持っていた。また、日本の若者と中国の若者の文化はさほど変わりがなくどこの国でも同じだなと思った（2009、男子）。

- ・とても有意義な時間を過ごせました。その中で、中国の人が日本に抱く特別な思いを直接聞くことができました。今までは中国語を学ぶ際に、中国の歴史や日本との関わりを学ぶ必要性を感じていなかったのですが、中国の学生との交流を通じて歴史や関係を学ぶ必要があると気付きました（2010、男子）。
- ・日本と中国の生活、文化、考えなどたくさんの違いを知ることができた。私よりも日本のことを知っており驚いた。日本の情報をインターネットで頻繁にチェックし、日本のドラマ、映画を吹き替えなしで鑑賞するなどしているようだ。日本語を小学校から勉強していると聞き、本当に日本が大好きで、私ももっと見習わないといけないと感じた。また補講の先生と一緒に観光、買い物、さまざまな場所へ行き、有意義な時間を過ごせた（2013、女子）。

補講について楽しかった、充実していた、有意義であったなど、多くの学生はこの機会に満足している。「すべてが中国語」という午前中の緊張した授業とは違って、学生同士のリラックスしたなかで意見交換を行うという体験の確保は今後の教育プログラムを構想するうえでは不可欠の領域である。それは、学生のコミュニケーション活動を活性化するからであり、授業空間の外で自由になされるからである。授業でわからなかったこと、発音や声調の指導、新たな語彙の習得、中国に来て疑問に思ったことの解消、日常生活や文化のあり方、お互いの国の関係、若者の流行語、趣味、映画・ドラマ・アニメ、芸能、日本と中国の違いや特徴など、学生同士の会話は多岐に及んでいる。

4-4. 授業外の中国語コミュニケーション実践

上に見てきたことからだけでもこの語学研修が参加した一人一人にとって自分を成長させる機会となっていることが明らかである。キャンパスの外に出た学生は何を経験し、どのような成果を得ているのだろうか。中国語を使ってコミュニケーションを取ろうとする積極性が出てきたことを窺わせる内容が多い。

- ・今まで、中国語では中国人と話す機会もなく、中国語の授業も辞書に頼ってばかりだったので、果たしてそんな自分が中国に行って、中国人と会話ができるのだろうか悩んでいました。実際、中国に行ってみて、授業も、買い物も、交通機関でも、部屋で見るTVさえも全部中国語だと、最初の1日2日はホームシックになりましたが、それ以降は耳が慣れたのか、周りが中国語であふれている状態が、逆に自然に感じられるようになりました。また、北京外国語大学での授業や補講も、初歩のテキストを使った授業で、しかしながら生活には欠かせない言葉をたくさん教わりました。とくに、挨拶や、買い物の仕方（値段のまけ方）、道の聞き方などは、知ったその日にはもう使っている状態でした（2009、女子）。
- ・来たばかりの頃は授業中以外に中国語を話すのがドキドキして、なかなか話をするのができなかったけど、最後の方には街にいる人たちやお店の人と話しをしたりして、自分が話している中国語が通じるのはすごく嬉しくて、街の人たちと楽しく会話をしている自分がいました。中国語が飛び交う中で生活をしているうちに自然と新しい単語を覚えたり、先生や街の人たちと話すうちに、発音の間違いに気づき正しい発音を覚えたり、本当に良い環境の中

で生活できたと思います (2009、女子)。

- ・この17日間は毎日が手探りで、生活の全てが勉強だった。耳に入ってくる言葉や、目に見えるものの全てが中国語で、戸惑うことも多かったが何とか理解しようと必死になった。積極性を見せようと心に決めていた会話は、初めは気恥ずかしさもあり、ぎこちなかった。早すぎて聞き取れないことが多く、分からないことを何気なく笑ってごまかしてしまうこともあった。しかし、中国語を話さなければコミュニケーションが取れない。言葉を口にしなければこの地を訪れた意味がない。時間がかかっても、文法に誤りがあっても、何としてでも気持ちを伝えられるよう言葉を探した。耳が慣れてくると、実際に現地で会話をしてみなければ生まれてこない、あいづちなどの微妙なニュアンスもつかめるようになった (2009、女子)。
- ・最初は、たった2週間で何が変わるのだろうかって思っていました。実際2週間中国で過ごしたところで、ペラペラに話せるようになるわけではありません。でも、何とかして中国人と話したい・言っていることを理解したいという思いが強くあったせいか、明らかに行く前よりかは聞く力がついたと思います。…言いたいことを中国語に変換できても、発音がやはり難しくてなかなか通じない時は本当に悔しかったです。でも「積極的に中国語で会話する」という目標は達成できました。むしろ中国語を使って話したくて仕方ないぐらいでした (2011、女子)。

中国語の勉強は授業やキャンパス内だけで完結するものではない。す

べてが中国語という言語環境のなかでは当然のことであるが、中国語を話さなければコミュニケーションが取れないし、耳がしだいに慣れて聞き取りができるようになれば、自分の中国語が通じるという実感はより確実なものとなる。会話練習の機会は、スーパーマーケット、パン屋、映画館、動物園、地下鉄、バス、タクシーなど、日常的な生活空間のいたるところにある。また、店員さんに話しかけられたとき、道を尋ねたいときなど、街中の店で値切するための交渉をするとき等々、無口の自分に閉じこもっては何も解決しないし、日常生活のすべての場面で中国語を話さなければ自己と中国という異文化社会との関係が成り立たない。こうした言語実践の環境に身を置くことで、学生たちは着実に自信をつけていくのである。それは、自分の留学前の中国語学習の弱点や欠点などを見なおし、正しい発音、声調の重要性を再認識する機会でもある。レポートの多くはこの点に触れている。

4-5. 中国イメージの転換

語学研修に参加して得られる最大のメリットは、何とんでも日常生活の様々な場面で中国語を使う機会が増えるという一点に尽きる。日本においては中国語の授業でしか中国語を使う機会を持たない学生が参加者の大半を占めている。大半の学生は初めて中国に一定期間滞在し、その間、中国社会を観察し、あるいは体験し、日常生活の面で様々なかわりを持つ。そして、こうした異文化体験を通じて、学生たちは日本の価値と全く異なる世界や価値、社会システムなどが存在していることを実感する。

レポートに書かれた内容は、上述したように、語学面については授業内容、補習、街中での中国語コミュニケーションの経験、文化面では中国の歴史文物、中国料理・飲食、公衆道徳・交通マナーなどにおける中

国と日本との違い、メディアによって作り出されたイメージと現実の違いなどからなる。こうしたなかで興味深い問題は、第3回（2011年度）から中国イメージや反日感情の有無への関心についての記述が多くなるという点である。以下では、この点に関する記述のいくつかを紹介しておこう。

- ・中国に関しては多くの偏見も持っていた。中国食品の安全性や尖閣問題、中国人の人格、偽物問題などがあり、これらについては私はニュースなどで知り、マスコミなどが作り上げたイメージや考えからの表面的な知識しか持っておらず、中国人を国全体としてしか捉えていなくて、国の問題から単純に中国人の各個人も悪い人たちだと考えがちだった自分の考えから脱却する必要があったものだと考える（2012、男子）。
- ・日本においては、中国に対して良くない印象を持っている人が多いように思う。空気汚染や数年前日本を騒がせた冷凍餃子問題、オリンピックにおける開発問題、尖閣諸島問題などマイナスイメージは様々あげられる。＜中略＞実際の北京の街はどのようで、環境状態、食についてはどうなっているのか、そして中国人にとって日本人はどう思われているのか、限られた報道から得られる情報だけでなく、自分で判断したかったのだ（2013、女子）。
- ・私は勝手な思い込みで日中間の関係があまり良くないから、日本人を嫌いな中国人が多いのではないかと考えていた。しかし、そんなところは全くなく、私たちが日本人と分かっても、とても親切に丁寧に接してくれる人ばかりであった。たとえ、日中間の関係

が良くないとテレビのニュースなどで報道されているからといって、テレビに映っていること報道されていることがすべてではないということがとてもよくわかった。これは実際に中国に行ってみないとわからないことであったと思う（2013、女子）。

- ・いま政治面で中国と日本の関係はあまりよくありません。中国に来る前は、日本人の私達に中国人はどんな態度をとるのだろう、反日感情はあるのかと不安でした。しかし不安がることは全くありませんでした。〈中略〉私が今回の研修で関わり、お世話になった中国人は、本当に皆いい人ばかりです。これが全てというわけではないのは分かっています。私はほんとに恵まれていたなと思います（2013、女子）。

中国社会の実際をどのように伝えていけばよいのか、この点は国内外の政治問題などが絡む判断の難しい問題である。しかし、今日メディアが人々の自己意識と他者認識に大きな影響を与えるようになっており、日常を生きる一人一人もそれに引っ張られたイメージ形成を行うことが多くなっている。学生の記述において注目したいのは、日本国内で見聞したことが一面的であり、それを自分の体験によって、すこしプラスの方向に転換・修正できたという点である。メディアからの限られた情報だけに頼らず、自分で判断したいという意識、特定の観点やイメージ、偏見からすこし距離を取り、自分の目で物事を判断しようとする姿勢、これこそ「多文化リテラシー」の基本ではないかと思われる。すべての文化をその違いも含めて理解し、人としての適切なコミュニケーションが図れる人材を育成する。この点こそが、大学教育が受け持つべきミッションであり、海外研修プログラムの役割であろう。

5. 結びとして

短期語学留学プログラムが1年間（もしくは半年）の認定留学や協定校留学への足がかりとして機能していると評価してよいのかどうかについては引き続き、分析が必要である。仮にそうではなくても、短期研修に参加した学生の多くが中国に対するイメージの修正や多様な社会ルールや価値体系の存在に気づききっかけを得た点は重要である。レポートからは語学力が向上したことだけでなく、さまざまな経験を通して人間的に成長したことが窺え、物の見方や視野が広がっている。大半の学生は帰国後、一定期間を過ぎると日本社会の現実に回帰していく。その点からすれば多くの学生にとっては短期研修はそれ自体で完結するものである。とはいつても、人生の早い段階で、中国という「異文化」に触れる機会を持ったことは重要であろう。

この研修プログラムは自分一人で留学するための予行演習の場、換言すれば、お試し版のミニ留学としての意味合いを帯びている。プログラムとしてみれば、今後も部分的には改善の余地があるとはいえ、「過保護」の状態にあるという評価は正鵠を射た指摘であるかもしれない。文部科学省が言う「学士力」には「多文化・異文化に関する知識の理解」が重要な項目として含まれているが、そこで言われる「学士力」にはコミュニケーションスキル、情報リテラシー、論理的思考力、チームワーク、リーダーシップがある。これらの育成は、導入教育的な意味合いの強い引率型のプログラムでは限界がある。その意味では、海外に出ていく前段階で外国人留学生との交流機会を増やし、異文化トレーニングを行って、これに参加するだけでも会話能力面では短期留学に参加したのと同じような効果が上げられる仕掛けを自国のキャンパス内に設け、短期留学プログラムには自覚した個人が自らの意志の下に自律した「個」を鍛え上げていくという形に教育目標を再設計しなおす時期が来ている

のかもしれない。

今後は、多言語交流室を活用した自律学習や異文化トレーニングの機会を増やしていくことなどの措置を検討し、国際連携によって互いの長所を提供しあい、そうした課題を実現していくことが必要となるだろう。特に、参加者の語学力を留学以前においてレベルアップしていくべきかと思われる。その点では、通常の授業カリキュラムにおいて展開されている授業形式の工夫も含めた内容の充実がさらに求められる。北京外国語大学との国際連携型の教育プログラムの創出は、このような方向にむかう契機となりうる点で有意義であったと言えよう。

資料 「マスターしておきたい中国語—知るほど面白い中国語」

作成：張慧芬

I. 留学生活編

1. 北京の気候

第一次来北京吧。

是的，第一次来北京。

北京是大陆性气候，不常下雨，所以很干燥。

不过，昨天下雨了。

这是欢迎客人的“喜雨”。

是吗？太好了。

在北京期间要多喝水。但是，不能喝生水。请喝矿泉水。

谢谢！

2. 初対面の挨拶言葉

你好！我叫王芳。

你好！我叫山田一郎。

你是文教大学的学生吗？

初次见面，请多关照！

我学过一点儿汉语，但是说不好。

你的发音很不错。

汉语发音很好听，但是四声很难。

3. 日常の挨拶言葉

你好！

你好吗？

请问。

请进。

请喝茶。

谢谢！不谢。

不客气。

对不起。没关系。

再见。明天见。

4. 日程

你们哪天到北京的？

我们是8月15号到北京的。

你们在北京呆多少天？

我们预计在北京呆16天。

星期几去长城？

大概星期二去长城吧。

我很想去长城。不是说：“不到长城非好汉”吗？

5. 買い物

这个多少钱？

一共多少钱？

太贵了。便宜一点儿吧。

太贵了，我不要了。

那么，你说多少钱？

讨价还价

6. 飲食文化

吃饱了，谢谢你。

你真的吃饱了吗？

那吃点儿甜点吧。

不行，不行。

我一点儿都不能吃了。

吃甜点算是另外一回事吧。

不会吧。

7. 郵便局

我给家里寄明信片，这里的邮政编码是多少？

哦，这里的邮政编码是100089。

谢谢！我突然发现中国的邮政编码是6位数，日本的邮政编码是7位数。

是啊。好像日本人喜欢单数，中国人喜欢双数。

日本人认为双数除得尽。所以喜欢单数。

是吗？中国人喜欢“成双成对”。

原来数字后面包含着文化元素啊！

从数字可以看出中日两国文化得不同点。

是的。我得赶紧去寄明信片了。

8. 教室用語

你们好！

老师好！

现在开始上课。

点名。请打开书。

今天学习第一课。

请看第〇〇页。

请看生词。

请看黑板／PPT。

请不要说话。

请跟我念。

请再说一遍。

懂了吗？懂了。／不懂。

有问题吗？有。／没有。

我有一个问题。

什么问题？

请问，“手机”是什么意思？

“手机”是「携帯電話」的意思。

今天的课就上到这儿。

下课！

II. 中国社会・文化についてのミニ知識

1. 北京の交通

一卡通（市バス専用カード）、上车请刷卡（カードをかざす）、下车请刷卡（バスによる）、地铁（全線2元）、私家车（マイカー）、开车限行（車の走りを制限する）、买车摇号（無作為番号を抽選する）、堵城（渋滞の町）

2. 交流の話題

网络（インターネット）、环保（環境保護）、旅游（旅行）、音乐（音楽）、体育（スポーツ）、影视（映画、テレビ）、动漫（アニメーション）、美食（美味な料理）

3. 网络用语（ネット用語）

博客（プロガー／ブログ）、播客（ポットキャスター）、威客（ネットで他人にいろいろ教える人）、搜客（よく検索する人）、拼客（食事、車、部屋、ショッピングなどでシェアする人たち）、杯具・悲剧（悲劇）、洗具・喜剧（コメディ）、偶・我（私）、美眉・妹妹（恋人）、炒古（炒股）「骨董品の転がし」、「雷人」人を驚かす、ショックを与える表現。爆弾発言など。

4. 数字の面白さ

日本は7桁（〒657-0011）、奇数（単数）

中国は6桁（〒100089）、偶数（双数）

花瓶一对（花瓶二つ）

热水瓶一对（魔法瓶二つ）

搪瓷脸盆两个（ほうろう洗面器二つ）

绣花枕套一对（刺繡の枕カバー二枚）

5. 縁起がよい数字

「6」は順調であるという意味

六六大顺（自分の願いはみな順調にうまく叶えられると思われる）

結婚式、重大な商談（六日、十六日、二十六日）

「8」-发（「財をなす」金持ちになる）

「18」要发（お金が儲かる）

「168」一路发（お金がずっと儲かる）

「518」我要发（私はお金が儲かる）

「888」发、发、发（とにかく儲かる）

北京オリンピックの開幕（2008年8月8日午後8時）

「9」－最大限を象徴している。

「久」（久しい）と音が同じです。

九龍壁

故宮博物館（9999間の部屋）

写真1



写真2



写真3



写真4



参考文献

文教大学文学部中国語中国文学科

2009 『2009年中国短期語学・文化研修（試行）報告集』。

2010 『文教大学文学部第1回中国短期語学・文化研修報告集』。

2011 『文教大学文学部第2回中国短期語学・文化研修報告集』。

2012 『文教大学文学部第3回中国短期語学・文化研修報告集』。

2013 『文教大学文学部第4回中国短期語学・文化研修報告集』。

学校法人文教大学学園創立80周年史編集委員会

2007 『文教大学創立80周年記念誌』。

白井啓介編

2005 『中国語中国文化科における中国語教育の再構築に向けての試行的研究』（文教大学文学部中国語中国文学科、プロダクション昇朋印刷）26-36頁。

朱全安

1993 「中国における外国人向け漢語教育－その近況について－」

http://sucra.saitama-u.ac.jp/modules/xoonips/download.php/BKK0000495.pdf?file_id=24451